

郵便
報知新聞
第五百七十六号

ワライで轉ぶ妓の半點許と誰が
口揃へ川柳何ぞ詠む和漢蘭
ぐうと夫と讀され往來で爺と路傍
轉ぶは是れ縁りのえんん所へ嘘の
本所の内ふれと外手町も月三十日
午後一時の兩人の婀娜者技も姿も霞
町小評判高きさん小濱年二十と三
三四の足撥と早めつ泥路蹴とく
真鳥墨田の白く消残る雪の跡さ
何やほし我思ふ人追付むと行手
の路の出合頭六十の公羽の身と避に
暇ある物の美妻は素轉倒ハト思
ど夫あつは往んとせむ目捷と巡査翁
と接あて之を起し二人馬より御まて
蹴るがに左り様とて也(ひつてり

